

# 日本の寓話、童話、民話、伝説、説話等の系譜的総合的研究

—諸外国のそれら（すなわち Fabel, Märchen, Volkssage u.s.w.）との  
比較において—

Treatise on the fable and the others  
from the comparative point of view

## 〔第一報〕

馬場喜敬

### 1

標記の研究テーマを、生活科学研の一プロジェクトにくみ入れるに至った経緯については最初に述べておくべきであろう。但し本稿のそれは筆者サイドのものであって、本プロジェクトの他のメンバーにおける夫々の意図、或いは特定の関心領域については、第二報以降にて述べられることになる。なお、「夫々の意図」とか「特定の関心領域」といったが、それらは本プロジェクトが基本的に抱いている統一的目标乃至全体的構想の枠組を損うものではないことはいうまでもない。

1973 アリとキリギリス—イソップ寓話考—（「日常性のなかの哲学の顔」所収・酒井書店）

1980 イソップ紀行（「家庭科学」第83集1980年12月）

1985 イソップ寓話の世界を旅する（一）、（二）（本学「生活資料館」館報No. 4, No. 5）

1986 世界宗教と日常倫理・序説（「ボルノオと家政哲学—生活世界考—」の第4章及びその補註。北樹出版）

以上はイソップ関係の拙稿のささやかな歩みである。なお「世界宗教と日常倫理・序説」は「イソップ紀行」の改題にほかならず、ただこうすることで、イソップ問題へのアプローチの

動因を顕在化させたことになる。そしてこの辺の事情を「補註」に記したのであって、「補註」は、いまここで述べようとしていることを拙著の中で先取りした形になる。そこで重複をいとわず、以下にそれを記す。

### 補註

○本章は「世界宗教と日常倫理」という大きな題目を掲げたが、この本文の初出の折りのタイトルは「イソップ紀行」であった。しかし、ともかくもイソップ紀行を通じて、われわれ思想史に携わる者がつねに潜在的に抱いていたこのテーマ（〈世界宗教と日常倫理〉）が顕在化するに至った。他の途を通じて、このテーマに至ったことであろう。つまり、このテーマは思想史に携わる者にとって不可避な根本問題であるということである。——「世界宗教と日常倫理」はM・ウェーバーの「世界宗教と経済倫理」になぞらえたものであることは、いうまでもないが（本文の末尾の、〈上からの宗教社会学〉と〈下からの宗教社会学〉に対応）、日常倫理（生活倫理としない）の語を使ったことについては、「生活世界」「日常性」或いはまた「世俗化」などの語の意味とともに明らかにしなければならない。別稿とする。

## 2

○今年(1986年)4月、私の大学付属の生活科学研究所のプロジェクトとして「日本の寓話・童話・民話・伝説・説話等の系譜的・総合的研究——諸外国のそれら(すなわち Fabel, Märchen, Volkssage u.s.w.) との比較において——」を発足させた。3年間の予定である。いろいろな途あるなかで、イソップ紀行の初心をいかして、寓話(イソップ寓話)が先頭にきている。しかし一見明らかな通り枠が拡大されたことも事実である。寓話のほかに、童話、民話……という。そうしてそうすることが既述のテーマ(「世界宗教と日常倫理」)の探求により一層資するであろうというおもしろいからである。ところがそうなる、そもそも寓話とは何か、童話とは何かという一連の問いに悩まされることになる。そのうちのどれをとっても、こうした領域の専攻者でない者(私)にとっては大へんな難問である。夫々の専攻者は夫々の研究過程のなかで、それが何であるかを基礎付け(Grundlegung)しているであろう。それを知りたい。それを遍く知りたいのであるが、しかしその作業の完了を待っていたら、このプロジェクトは当分出発できそうにない。そこでここでは途を踏み出すべく(heuristisch)次の仮説をとる。すなわち(寓話とは何か童話とは何か……、を理論的、文芸史的にとらえるのでなく)、

- ①寓話をイソップ寓話において理解する。
- ②童話をグリム童話に定位する。
- ③伝説については、定説的な対象をひとまずにおいて、イエスにまつわるもの(伝承文学としての聖書)すなわち新約聖書中の三共観福音書を以てする。
- ④説話は今昔物語をその代表として分析、理解する。——

という方法である。

この途を歩きとおすことは大へんな労苦である。しかしスピノザのことばを銘として頑張ることにしよう。

スペテ高貴ナルモノハ稀レデアルトトモニ困難デアル

本稿は、このプロジェクトの初年度の報告であるので、上記を以て、研究の方向を予示するにとどめたい。以下は補足の意味で「寓話」に関し若干を記す。

周知のように、寓話とイソップ寓話とはしばしば同義語として扱われる。「寓話をイソップ寓話に定位して理解する」ということは、したがって、とり立てて新しい提言というものではない。しかしイソップを意識して「寓話」という一文学ジャンルを活用した作家たちの作品を対象とした寓話論も成り立ちうる状況が生じたことも事実である。さらにまた「詩作(Erdichtung)はどれも、詩人がそれにある一定の意図を結びつけているものとしては寓話といつてよい」(G・レツシング)という拡大された解釈にまで至りうる。上記提言は一応それらを「括弧に入れておく」というほどの意味はもっている。

寓話=イソップ寓話。ではこのイソップとは何者か。このいいふるされた問題について、必要があれば後に詳論するが、ここではカット代りの一枚の絵を利用する。

これはC・G・プロフィットの「フリジヤ人イソップの生涯と寓話」(1781年)(コペンハーゲンとライプツヒヒにて刊行)の口絵に掲げられたものであり、イソップの生涯の簡明な見取図を与えてくれる。

①イソップは主人のいちじくを食べたことで咎められる。かれは無実を証明するのに、水を飲んで胃物を吐き出し、他の中傷者たちにもそうすることを強要する手段を使う。②イソップの主人クサントゥスは奴隷たちに“リンゼ”の料理を命ずる。語意を察したイソップは<かしかい>行動をする。③イソップは主人に悪ふざけを演ずる。クサントゥスは女房を憎んでいるが、女房の食事のことで、クサントゥスの心をためす。④イソップは(古代ローマ)法務官に会い、機知に富んだやりとりをする。⑤イソッ



プ、リデイアの王に解放を訴える。⑥デルフォイ人たちが投石してイソップを殺害する。

以上によってみても、イソップが寓話「作家」活動に自由に従事できる境遇になかったことは一目瞭然であり、奴隷の身分から解放されたのちも、デルフォイの神殿で、政治的理由から、神殿の金盃盗みの罪を着せられて殺害された、というようなかれの人生行路を背景においてイソップ寓話を考えると、イソップ寓話は「実在した」イソップを介してはいるが、イソップがひとりで書いたのではない、という像がうかび上る。

実際に、イソップ寓話とよばれているものはイソップその人の行跡を題材にしたものが多数含まれている。イソップは、そのときこう語りかく行動した、ということもイソップ寓話の内容である。こういうことからまた、イソップ寓話は、イソップの時代に、すでに以前より語り

つがれてき、かれの生活圏域にひろく流布していた話のかずかずを、かれのおかれた状況、困難な場面などで、主人に対し、同輩に対し、或いは権威に対し、主張したいことを表現する器物として活用したものの集成である、という像がうかび上る。

これらに関連して、以下3つのこと。

- A. 「実在・非実在」の問題
- B. 誰が文字という形で集成したか。
- C. 寓話についてのアリストテレス的見解

A. 「実在した」イソップ——イソップ非実在論の反証であるが、この点に関しては手取り早く最近の、小堀桂一郎著「イソップ寓話」(中公新書、1978年)を援用する。本書は早々とイソップ実在論を前提している。この問題では、誰もが先ず第一に引用するヘロドトスの「史誌」(Historia. B. C. 600頃) 134も活用している。

「史誌」134は大略こうのべている。「トラキヤ生れ、サモスのヘパイストポリスの子。イアドモンに仕えた。(クサントゥスに仕えたのはこれ以前——筆者註) 遊女ロドピスもアイソポス(=イソップ)と同じくこのサモス人に仕えていた。のち解放されて諸国を歩き廻っているうち、コリント湾の北岸に面したデルフォイにおいて、何やらの科で死罪を宜せられてほぼ50才の生涯を閉じた。

この本は、イソップは実在した人物であるとしても、イソップ寓話には、かの「ホメロス問題」と同じような問題がつきまとうという。

「ホメロス問題」すなわちホメロスの作品とされるイリアス・オデュッセアの作者が果して一人か複数か、という問題が、イソップ寓話にもあるというわけである。当然である、とともに、ここではすでに「書いた」は否定されるとみてよいから、これはすぐに〈B〉の問題となる。それとともに、イソップ寓話ではホメロス問題よりもソクラテス問題、イエス問題に近い面がある。

イソップは語った。そして語りはしたが、書

くことはしなかった。ソクラテスと同様である。だがソクラテスの場合は、周知のように、かれに師事したプラトンが、ソクラテスの死後、直ちに筆をとってソクラテスの言行を生き活きと書きとどめた。Sokrates-Platon-Einigkeit がいわれる所以である。もちろん別人格の完全同一性などありえないとしても、密切な内面的つながりのあることは明らかである。

ナザレのイエスの場合は、〈ソクラテスの場合〉とは若干異なる。

現在知られているマルコ・マタイ、ルカ福音書の成立は、イエスの死後しばらく時間をおいている。このため、イエスの歴史的実在論議もひき起された（19世紀歴史主義派、聖書高等批評など）。イエスは語った。しかし書かなかつた。そして直接の弟子たちでなく、時代をへだてた記者が、イエス時代の原資料を探索しつつ各自のイエス像をつくったのである。この点において、イソップ寓話は、ソクラテス問題よりも、イエス問題との類似が濃い。

イソップは書かなかつた。すでに流布していた寓話を語った、ということになると、その寓話はどこからきたのであろう。イソップ寓話が、イソップの創作性によるところがあるとしても、voresopisch 的に存在した寓話をぬきにしては考えられないとすると、それはどんなものであつたか、いつ生じたか、など、われわれの遡行的関心は高まる。それはついにとめどなく高まり、Urfabel の仮定へと導かれる。

・ Zurück zu Urfabel! これは本プロジェクトのかくされた動因の一つをなすものであつた。

B. イソップ寓話を文字にした最初の人は誰であつたか。この難問を、さし当り Loeb Classical Library の “Babrius and Phaedrus” により、夫々からの若干の引用によって間接的応答をうるにとどめておく。なお、パブリウスは

ギリシャ語で書き、フェードルスはラテン語で書いた。

### 1) パブリウスの序文 (Prologue) にいう。

地上に最初に住んでいた人種があつた。わが子プラレクスよ。それは黄金とよばれる人種だったのだ。かれらのあとに、と人々はいうが、異った世代（種族）である白銀という人種があらわれた。そしてわれわれはかれらの間から生まれた系統（未裔）としての三代目である。すなわち、われわれの種族は鉄の世代である。

さて、金の種族の時代には、ひとり人間のみならず、すべての他の生きものも話す能力をもっていて、われわれ自身が今日、他の人々とお互いに話すときに用いる多くの言語（ことば）と同じようなことばに慣れ親しんでいた。ことばの集合（組み立て）も、森中の最奥にいる、こうした生きものによっても保たれていた。

松の木ですら語った、そして月桂樹の葉もまた。海の中を泳いでいる魚は親しげに船乗りと雑談した。そしてまた全く知的に雀は農夫と会話を交えた。あらゆるものが大地から成育した。そして大地は人間に何の要求もせず、よい仲間意識が、神々と死すべき者たちとの間にゆきわたっていた。

事情がそのようであつたということ、あなた方は、この賢き古えのイソップから学ぶであろうし、完全に理解するであろう。かれはわれわれに、自由な散文の形式で、寓話 fables を語ったのだつた。そしていま、私はこれらの寓話のそれぞれを、わがミューズ（詩の女神）の花をもって飾るであろう。私は、あなた方の前に、詩的な六角形の蜂蜜の小箱をおこう。あたかも甘い蜜をしたたらせ、蜂の刺すような、諷刺的な、強弱格の詩文の固い弦をやわらげているような飾り小箱を。

2) フェードルス\* のイソップ的寓話：第一巻のプロローグから

\* アウグストス (B.C. 63—A.D. 14) すなわちローマ初代皇帝の公民であるフェードルス

イソップが私の源泉である。かれはこれらの寓話の実質をつくり出した。しかし私はそれらを6行詩 (senarian verse) という完成した形式に移しかえた。二重の才能はこれとともにやってくる。わが小さな著述、すなわち、それは笑いをひきおこし、そして賢い助言によって、人生の行為を案内する。誰かがひとり野生の動物のみならず、樹木もまた言葉を発するという理由で、それをおとしめることをえらぶべきとするなら、その者をして、私が決して生じなかった事柄を、たわむれに語ることをしたのを、想い出さしめるがよい。

C. イソップ寓話には、イソップ自身の行蹟が題材とされたものが数多くくみ込まれている、という古くからの事情がアリストテレス (B.C. 387—322) の寓話論を生み出しているようにおもわれる。アリストテレスの寓話論は、「弁論術」、その第20章において展開される。かれは寓話を、民会演説向きのものである、というのである。

……寓話は民会演説向きのものである。そして同じような過去の事件は見出すのに困難であるけれども、寓話を工夫するのは容易であるという美点を持っている。というのはまた比較と同じように、もし人が類似点を見ることができれば、寓話を工夫しなければならないが、この類似点を見ることは学問をすれば、その知識からより容易にできるからである。ところで寓話を通じての弁論を手に入れることのほうは容易であるが、しかし審議のためには事件を通じての弁論の方が有用である。というのはたいていの場合、未来の事

件は過去の事件に類似しているからである。

前にさかのぼっての引用。——

……寓話はステシコロスがパラリスについてまたアイソポス (=イソップ) が民衆指導者のために作ったそのようなものである。すなわちステシコロスはヒメラの民衆がパラリスを独裁將軍として選び、護衛兵を与えようとしていた時、他のことを話した後で、彼らに次の寓話を語った——馬が自分ひとりで牧場を占領していたが、しかし鹿がやってきて牧場を台なしにしたので、鹿に復讐しようとして欲し、ひとりの人間に尋ねて、彼と組めば鹿に復讐することができるかどうかと言った。しかしその人間は、できる、ただしそれには君が馬衡を受け入れ、そして自分が槍を手にして君の背中に乗ることが条件だ、と答えた。馬は同意して、人間が背中に乗った時、馬は復讐することの代りに自分自身が人間の奴隷になった。「こういう風に諸君もまた、敵どもに復讐しようとして欲しながら、馬と同一の目にあわないように気をつけ給え。というのは、諸君は独裁將軍を選んだので、すでに馬衡を持っているからだ。しかし護衛兵を与えて背中に乗ることを許すなら、やがて諸君はパラリスの奴隷となるだろう」と言った。引きついで——

またアイソポス (=イソップ) はサモスで或る民衆指導者が死刑の判決を受けた時に、民衆演説をして言った——狐が川を渡っていて切岸の裂け目に押し流された。しかし抜け出ることができないので、長い間ひどい目にあって、たくさんの犬ダニがその膚にくっついていた。しかしそのあたりをぶらついていたハリ鼠が、その狐の有様を見た時に、気の毒がって、犬ダニを彼から取り除いてやるかと訊ねたが、狐は承知しなかった。ハリ鼠が何故だときいた狐は言った。「こ奴らはもう私に満足している。そして奴らの吸うた血は少しばかりだ。しかし君がこ奴らを取り除い

てくれたら、他の飢えた奴らがやってきて残った血を私から吸うのだ」「ところで諸君も、サモスの人々よ、この男はもはや何も害を与えることはないだろう（というのは彼は「今は」金持だから）しかし、もしもこの男を殺すなら、他の貧乏な奴がやってきて、残ったものを盗んで、諸君の公金を使い果たしてしまうことになるだろう」。

3

本稿は未だ、寓話、童話、民話……などの相互的な、重層的な関係について立入った論議には入らない。そしてもう少し「イソップ寓話」にとどまる。

ヨーロッパの哲学史・思想史を通じ、イソップ寓話に対する共感と反撥、そしていわばその中間的立場がみられるのは興味あることである。すなわち a)イソップ党 b)イソップ嫌い、c) 中立派。夫々に次の名があげられる。

- a) ソクラテス ラ・フォンテーヌ ルター レッシング
- b) ルソー
- c) カント ヘーゲル

a) 前出拙稿でもとり上げたソクラテスは、プラトンの「パイドン」によって、イソップ党であったことがよみとれが、その感化のもと、フランスのラ・フォンテーヌは、大のイソップ党であったといってよい。さらにここでルターとレッシングを加えたいとおもう。もちろん夫々同じようなイソップ党ではなく、ちがった意味合いが濃厚である。ルターの寓話のとり上げ方、それに付する神学臭のある教訓と、レッシングの近代的な劇作家的、心理学的、また歴史哲学的なよみ入れとをくらべると、イソップ党の名で一括するのはためらわれるほどである。しかし両者とも夫々イソップとの密接な結びつきを意識していることを共通点として、ここにあげ、併せて夫々の寓話作品の Auszug を掲げる。これは一次資料として意味があるとおもう

し、われわれの今後の論稿においても積極的に活用する予定である。

b) ルソーのエミールにおけるラ・フォンテーヌ批判、さらにロック批判は、そのままイソップ的道徳に対する辛らつな批判に通ずる。

c) これに対しカント、ヘーゲルなどは、その著作のおもわぬところでのイソップからの引用が注意をひく。ヨーロッパ教養世界でイソップがいかに日常化して人々の意識にあるかを示す好例をなしている。

ここがロドスだ、ここで跳べ

Hic Rhodus, hic saltus

——ヘーゲル「法の哲学」序文

……ライブニッツの説は、ちょうどイソップ物語に出てくる父親の遺言のようなものである。その父親は死の床で息子たちに、自分が畑のどこかに宝を埋めておいたことを洩らした。しかし彼はその場所をはっきり教えないうちに息をひきとってしまった。そこで息子たちは熱心に土地を掘り返したが宝は出てこなかった。こうして彼らの望みは空しく消え去ったが、掘り返したおかげで畑が肥え彼らは金持ちになったのである。……

——カント「形而上学的認識の第一原理」

第一章 矛盾律について

× × ×

M・ルター：イソップによる若干の寓話（1530）（目次の上に○印を付す）

「生涯にわたってルターはイソップ寓話を高く評価していた。かの古き知恵の書、それは中世においてもまた、実践的な生活訓のもっとも好まれた文学的源泉の一つであったのである。

かれを魅了したのは、動物物語が提供した

風刺的な、そして彼の時代には、それに加えて教訓的な適用のもろもろの可能性であった。

この古い書物に新しい適切な形式を与えることは、ルターが1530年夏、コーブルク滞在中にとりかかった課題の一つであった。かれは、ひろく読まれていたハインリッヒ・シュタインヘヴェルの寓話集〔1477/78年、アウグスブルグで印刷、刊行された〕を補充しようと欲した。この意図はしかし未完成におわった。シュタインヘヴェル版の164の作品のうち13をとりあげて改作し、それに序文を付すことを1530年にやりとげることができたにとどまった。』 —ベルント・メューラー

- ① 愚かさ。オンドリと真珠について
- 2 憎しみ。オオカミと小山羊
- 3 不誠実。カエルとネズミについて
- 4 嫉妬。イヌとヒツジ
- ⑤ 吝嗇。水に映ったイヌ
- 6 放埒。(ライオンの分け前)
- 7 この話は次の仕方でも語られている。
- ⑧ 盗み。
- 9 ツルとオオカミ
- ⑩ イヌとメス犬
- ⑪ ロバとライオン
- 12 都市のネズミと田園のネズミ
- 13 カラスとキツネ

### 1. 愚かさ。オンドリと真珠

オンドリが汚物をかきまわし、高価な真珠を見つけた。オンドリはこのようなものが汚物のなかに埋もれているのを見て、いった。

見よ、お前、すばらしい小さき物よ。お前はここに、歎かわしいおもいで身をおいている。もし商人がお前を見つけたら、きっとお前を有難がり、よろこんで、お前は大いなる榮譽をうるであろう。しかしお前はわたしのもとにあり、お前は全く私の役に立たない。私は穀物の一粒や虫けらの方をとる。それはすべての真珠にま

さるのだ。お前はいまあるがように、そこにいつづけるがよい。

教訓。この寓話は次のことを教えている。この小さな本は農民や粗野な人々のもとは価値がない。すべての芸術(技芸)や知恵がそれらの人々の間では軽んぜられているように、世間ではよくこういう、芸術はパンのあとで、と。この話はしかし、この教訓は軽んぜられてはならないことを警告しているのである。

### 5. 吝嗇。水に映ったイヌ。

走って川を渡ってきた一匹の犬がいた。口に一片の肉をくわえていた。ところでイヌは水に映った肉の影をみて、あれもまた肉であろうと思ひ違えをした。そしてその肉(の影)に向って、しやにむに跳びかかり、喰らおうとした。しかしかれが口を開いた途端、くわえていた肉はかれの口から落ちた。そして川の流れはそれを運び去った。こうしてこのイヌは、肉と影と両方を失くしてしまったのである。

教訓。われわれは、神が与え給うたもので満足しなければならない。少なきことをあなどった者には、大きいものも与えられぬ。多くを望みすぎる者は、最後には何ものもうることはない。かなり多くの者たちが、こうして不確かなものをあてにして、確かなものを失っているのである。

### 8. 盗人

盗人があるとき解放された。かれの隣人たちは、かれの結婚式を祝ってやった。というのは隣人たちは、この男がこれからは信心深くなるだろうと希望をもったからである。

そこへ賢い人があらわれ、みなが大へん喜んでのを見て、いった。

まあ気をつけてみていなさい。余りに喜びすぎてはいけませんよ。太陽は一度は解放することを欲します。そのことで世界じゅうがおののいたのです。あまり耐えがなくなつて、世界は

また天に向って呪いのことばを投げ、非難しました。ジュピターは天より訊ねました。その呪いはどういうことなのですか。

そこで全世界はいった。われわれはいま唯一つの太陽をもっています。そして太陽はその熱でわれわれにたくさんの危害を与えています。そこでわれわれはみな、ほとんど破滅してしまう。太陽がもっと多くの太陽を生み出すなら、何が生ずるのか。

この話は世界に次のことを示している。人々は悪魔を扉の上に描いてはならない。同じ種はその種の形によって子孫をつくる。盗人は他の盗人を産み出す。信心深い人々がふえるように力をかきなさい。悪人はそうでなくとも多すぎる。相当多くの悪漢は信心深い人々によって保護され、この者はその状況に応じてうまく立ち廻り、国や人々にきわめて有害となる。それ故お前が、誰を助言し助けたらよいか、気をつけなさい。見知らぬ子供たちや犬どものもとでパンは失なわれるとはよくいわれていることだ。

#### 10. 犬とメスイヌについて

妊んだメスイヌが卑屈な言葉を並べて一匹のイヌに頼んだ。あんた、私が出産するまで、わたしに小さな家を見つけ下さいよ。イヌは喜んでこのことをしてやった。さてこんどは小さな仔犬たちが成長し、イヌは自分の小さな家を返してくれるように求めた。しかしメスイヌは返そうとしなかった。とうとうイヌはメスイヌをおどし、メス犬に家を明け渡すように命じた。メスイヌは怒って、いった。あんたがそんなに悪いイヌだったら、わたしたちいがみ合うよりほかないわ。

この話は次のことをいい表わしている。シラミがもとでかいせんになったら、勝手に汚ごさせたらよい。お前が悪事を厄介払いすると、悪事が勢いついてはびこる。悪魔を、おひとよしに、客に招くべきではない。しか

し人々は厄介払いでことをおわらせることはできない。

#### 11. ロバとライオンについて

ロバはあるとき農民気取りで誇らしげであった。そしてロバは一頭のライオンに出会って、ライオンに嘲笑的に挨拶した。そしていった。私はお前に挨拶するぞ、兄弟よ！と。この侮蔑的な挨拶はライオンを不愉快ににした。そしてライオンはひとり胸のうちで考えた。わしはこの悪漢にどんな復讐をしたらよからうか。わしはこいつを叱ってやろうか。それとも噛み砕いてやろうか。だがそれではわしの名誉をうることにはならぬ。わしはこの愚か者をほっといてやろう。

教訓。汚物をもってかけ廻る者は、何を得るにせよ、失うにせよ、そこから泥まみれになって抜け出すだけである。

#### G・レッシング：寓話、全3巻（1759～1777）

目次細目と数篇の Auszug（数字の上に○印を付したもの）

##### 第1巻

- 1 寓話の女神があらわれて
- ② ハムスターとアリ（蟻）
- ③ ライオンとノウサギ（野兎）
- 4 ロバと狩猟馬
- 5 ゼウスとウマ（馬）
- 6 サルとキツネ
- 7 サヨナキドリとクジャク
- 8 オオカミと羊飼い
- 9 ウマとウシ（種牛）
- 10 コオロギとサヨナキドリ
- 11 サヨナキドリとオオタカ
- 12 好戦的なオオカミ
- 13 フェニックス（不死鳥）
- 14 ガチョウ
- 15 カシ（榎）とブタ
- ⑩ スズメバチたち



- 17 スズメ
- 18 ダチョウ
- 19 スズメとダチョウ
- 20 イヌ(たち)
- 21 キツネとコウノトリ
- 22 フクロウと宝探し男
- 23 若いツバメ
- 24 メロープス
- 25 ペリカン
- ② ライオンとトラ
- 27 ウシとシカ
- 28 ロバとオオカミ
- 29 チェスと騎士
- 30 イソップとロバ

第2巻

- 1 青銅の彫像
- 2 ヘラクレス
- 3 少年とヘビ(蛇)
- ④ 死の床についているオオカミ
- 5 ウシとコウシ(仔牛)
- 6 クジャクとカラス
- ⑦ ロバを連れたライオン
- 8 ライオンと一緒にいるロバ
- 9 盲目のメンドリ
- 10 ロバ
- 11 守られている小羊
- 12 ジュピターとアポロン
- 13 ミズヘビ
- 14 キツネと妖怪
- 15 ワタリガラスとキツネ
- 16 山羊のようなものたち
- 17 カラス
- 18 ゼウスと羊
- 19 キツネとトラ
- 20 人間とイヌ
- 21 ブドウの房
- 22 キツネ
- 23 ヒツジ
- 24 ヤギ

- 25 野生のリンゴ樹
- 26 シカとキツネ
- 27 とげのあるかん木
- 28 フリア
- 29 テイレシス
- 30 ミネルヴァ

第3巻

- 1 弓の所有者
- 2 サヨナキドリとヒバリ
- 3 ソロモンの幽霊
- 4 妖精のおくりもの
- 5 ヒツジとツバメ
- 6 カラス
- 7 動物たちの地位争い ①
- 8 (人間は裁判官になった) ②
- 9 (人間は我が身を退けた) ③
- 10 ライオンはやりつづける
- ⑩ クマとゾオ(象)
- 12 ダチョウ(駝鳥)
- 13 慈善者たち
- 14 //
- 15 カシ(榎)
- 16 年老いたオオカミの物語
- 17 拒絶されたオオカミは2番目の羊飼(牧師)のもとにやってきた
- 18 あらゆる善事はあらわれる
- 19 オオカミはいらいらして
- 20 オオカミは老いたるをなげいて
- 21 オオカミと6番目の羊飼(牧師)
- 22 オオカミは叫んで
- 23 ネズミ
- 24 ツバメ
- 25 ワシ
- 26 若いシカと老いたるシカ
- 27 クジャクとオンドリ
- 28 シカ
- 29 ワシとキツネ
- 30 羊飼いとサヨナキドリ

#### ◇ハムスターと蟻

「お前たち、哀れなアリどもよ」とハムスターはいった。「そんなちよっぴりのものを集めるために夏中働いているんだからね。なんならお前たちに、私の貯蔵品を見せてあげてもいいよ」

「まあきけ」と一匹のアリが答えた。「その貯蔵品とやらが、きみが必要とするより多いのなら、いかにも人間たちがきみの巣を掘って、きみの穀物倉を空にし、そしてきみたちの略奪的な食欲の罪ほろぼしを、きみの生命をひき替えにするとしてもそれは全く正当なことさ」

#### ◇ライオンとノウサギ

一頭のライオンが、おどけ者のノウサギと知り合いになったことを大いに有難っていた。そのノウサギがあるときライオンに訊ねた。

「本当なんですかね、ライオンさん。あなた方を、あのみすぼらしくて甲高い声で啼くおんどりが、いとも容易に追い払うことができるってことは？」

「いかにもそれは本当なんだよ」とライオンは答えていった。「これは一般的な注釈ということになるがね、われわれのような大きな動物たちは、例外なく、ある小さな弱点を身におびている。お前は、その実例として一つ、象についてきいたことがあるだろう。象には豚のブーブーといううなり声が、ぞっとするほど恐怖と驚愕のたねになるということを……」

「それ本当なんですか」とノウサギはライオンの話をさえぎっていった。「ああ、それで私もよく理解できます。何故私たちノウサギが、こんなにもひどく犬たちのうなり声を恐ろしがるかを」

#### ◇スズチバチ

勇敢な騎士の手で射殺されてしまった尚武の誇り高かりし馬の肢体は、腐敗、腐朽にゆだねられて、すっかり原形をとどめない風になってしまった。つねに活動的な自然は、他のものの

生命のためにある一つのものの解体を、いつも必要としている。

そしてこのような掟めで若いスズメバチたちの一群が、打ち捨てられた動物の屍体から飛び去っていく。スズメバチたちは叫んだ。

おお、われわれは何という神的な泉のもとにいることであろう。最高にきらびやかな駿馬、海神ネプチューンの愛児、これがわれわれの生みの親なのだ！

この奇妙な自慢話を注意深い寓話作家がきいていた。そして古代の不滅なローマ人の子孫としてのほかは、これっぽっちも自慢することのない今日のイタリー人たちのことを考えた。何故ならかれらは古代ローマ人の墓の上で生れたからである。

#### ◇ライオンとトラ

ライオンとウサギ。この両者はともに眼を開けたまま眠る習性がある。

はげしい狩りで疲れたライオンが、あるときいつものようにそんな風にして、かれの恐れられている洞穴の入口の前でねていた。

そこへトラが跳びはねながら通りかかった。そしてこの浅い眠り(うたたね)を見て笑った。

「何者も恐れぬといっているライオンよ！」トラは大声でいった。「おれは眼をあいたままなど眠らない。むろんウサギのようにはね」

「ウサギのようにだと」と、跳びはねながらライオンはひとほえした。そしてこの嘲弄者の喉くびにくいついていた。トラは血を流しながらのたうち廻った。勝利者の方、ライオンは落ちつきをとりもどし、再び眠るために身を横たえた。

#### ◇死の床にあるオオカミ

狼が臨終の床に横たわっていた。そしてすぎ去った生涯に、吟味するような眼差しを向けた。私はもちろん罪深い者である、とかれは(心の中で)いった。しかしそうはいつでも私は希望する、もっとも罪深い者の一人というのではな

いということ。私は悪事をしてきた。しかし善いこともたくさんしたのだ。私は想い出す、あるときなど、群れからはなれて迷い込んだ一匹の小羊がすぐそこまで近づいてきたので、私はたやすく捕えることができたのだったが、しかし私は何ひとつ事を起さなかったのだ。まさにこの時、私は一匹の羊が私を冷やかす、悪態をついているのをきいたが、私はおどろくほど無頓着だった。羊の守り役の犬に気づかわねばならないことなど全くなかったんだがね。

そういうことをみんな、ぼくはきみのために証言してやるよ。オオカミの死を看とりにきていた友だちのキツネが口をはさんだ。だってぼくの記憶では、どういう場にも居合わせていたからね。それはちょうどきみがいつているあの時だったよ。きみが大そう苦しうに骨をのどに詰らせていたのは。そしてその骨を気立てのよいツルが、きみののどから引ばってやっていた。

#### ◇ロバを連れたライオン

イソップのライオンにこういう話がある。ライオンは恐れさせる声を発して動物たちを狩るのだが、一方ではロバを連れていて、ロバはそれを見ればライオンがロバに危害を加えないやさしいものだともおもわせる役目を果している。そんな風にしてライオンが森を歩いていると、一羽の生意気そうなカラスが樹の上から、呼びかけた。

「すてきなお仲間ですね。ロバをお伴に連れて歩くなんて。恥づかしくないのかい」

ライオンは応じていった。「役立てることのできる者には、私はいつも私の側仕えの役を、惜しまずに与えてやるのさ」

こういう考えを、強大な者たちはみな、下級の者どもを自分たちの仲間に入れてやろうとするとき抱いているものなのだ。

#### ◇クマとゾオ

「何たる無分別な人間どもか！」とクマはゾ

オにいった。「かれらがわれわれ良き動物たちに求めていることといたら！ 私は音楽に合わせて踊らねばならない。この真面目なクマである私が。人間たちはこんな道化が、私の上品な性質に似つかわしくないことを皆目知らないんだから。でなかったら、どうしてかれらは私が踊ったとき、笑ったりしたんだろう。」

物わかりの早いゾオは答えた。「私だって音楽に合わせてダンスをするよ。それに私だってきみと同じように、真面目で人から尊敬されてよいとおもっている。でもね、見物人たちは私を笑ったことがない。人間たちの顔には喜び驚いている様子がよみとれるだけだ。だからクマさんよ、私のいうことを信じろよ。人間たちはきみが踊っているのを笑っているというより、そもそもそういう気を起したことを可笑しく思っているんだろうよ。」

### 補 録

#### A. 文献資料(1)

Babrius and Phaedrus (new ed, Ben Edwin Perry)—The Loeb Classical Library 1965

Phaedrus: Lieber Fabelarum (Lateinisch-Deutsch ((Fr. Rückert u. O. Schönberger) Reclam, 1975

Aesop's and other Fables: An Anthology Everyman's Library, 1971

イソップ寓話集(山本光雄訳)岩波文庫1941 [Aemilius Chambry: Aesopi Fabulae, Paris, 1925 を底本としている]

Martin Luther; Ausgewählte Schriften in 6 Bde. Insel Verlag; 1982—Fünfter Band/Etlliche Fabeln aus Äsop, 1530

Gotthold Ephraim Lessing: Sämtliche Werke 16 Bde. Walter de Gruyter, 1979 Erster Band/Fabeln, Drey Bücher [1759, 1777]

伊曾保物語(上)(中)(下)(日本古典文学大系90假名草子集)岩波書店, 1965

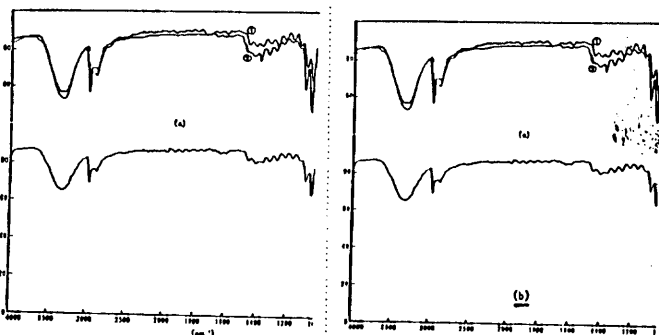
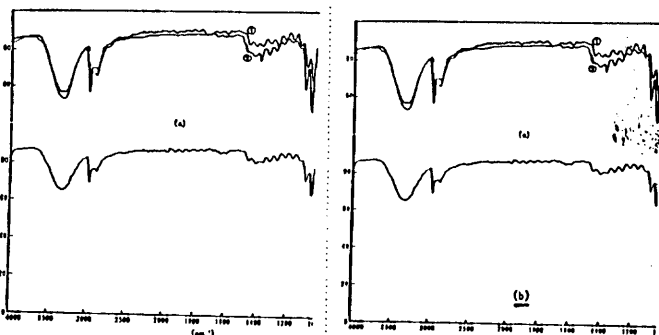
B. 本プロジェクトが生活科学研のプロジェクトとして進行していることの意義について一言したい。生活科学が何であるかについて、ここでは煩瑣な論議は控える。簡明に言えば、今日あらゆる科学がかの二分化的科学論のパラダイムから脱して、人間的諸科学 *sciences humaines*, *human sciences*, *die humanistischen Wissenschaften* に統括され、行為論的地平において意味付けを与えられている。従ってそれは生活倫理の問題とも相即なのである。(この点に関し爾余は、本学紀要第27集〔1987年3月刊〕の拙稿「人間諸科学・生活世界・現象学—Ein Prolog od. eine Prognose—」参照)

これまでの生活科学のカテゴリーからは異色におもわれたかも知れないが、本プロジェクトは、以上の如く、現代的意味において、生活科学への充実な寄与を表明しうるであろう。

C. 本プロジェクトのメンバーのうち、初年度(1986)の研究に参画したものは以下の如くである。

中地万里子(児童文化研究室)  
川合 貞子(児童心理学研究室)  
加藤 優子(児童文化研究室)  
馬場 喜敬(哲学第一研究室)

正 誤 表

ページ	左右	位置	誤	正
47	左側	下から 2行目	428/660nm== 1.25	428/660nm== 1.38
48	左側	上から12行目	428/660nm== 1.38	428/660nm== 1.25
52	左側	図 2		
57	左側	上から16行目	生じなかつた事柄を	生じなかつた事柄について
		下から11行目	見出すのに	見出すのは
58	左側	下から14行目	よみとれが	よみとれるが
59	左側	下から 9行目	このようなものが汚物の	このようなものが汚物の
	右側	上から 7行目	ように、	ように。
62	左側	下から 5行目	スズチバチ	スズメバチ
66	左側	下から11行目	多いくなどによつた。	多いなどによつた。
写真	左側	A 蒸 肉	( 100° C , 10° C )	( 100° c 10分 )
80		上から10行目	成分解性	生分解性
86		下から 8行目	U. S. W	U. S. W.